

社会に作用する心理的諸因子

(近代家族感情，社会感情，その他)

宮野直子

1.

社会には、必ず或感情がともなうものであると一般にいられている。しかしその社会が家族のような小社会であるか、あるいは大都市のような広い社会であるか、または水平的な関係にある社会であるか、それとも上下的な関係の社会であるかによつて、そこに作用する心理的因子には、それぞれ異なるものがあるといわれている。家族結合をつくり上げる心理的因子、すなわち家族感情、例えば夫婦の結合をもたらす感情は人類愛とは異なるものであると同時に、広い社会を作っている心理的因子や、あるいは平等の地位を有する人々の間の関係を作っている心理的因子と、支配や服従の関係を形成している心理的因子、例えば支配感情、優越感情、または服従感情や劣等感情と呼ばれるものとは明かに別なものである。それにもかゝらず、これ等の心理的諸因子は、たがいに相作用し合つて複雑な構造を持つ社会を形成しているのである。いまこれらの内容について、近代家族感情、特にその夫婦感情を中心として次に説明することにしよう。

2.

社会学においては結合定量の法則ということがいられている。(1)人間の持つ感情には一定の量があるから、それが或特定の人に集中されるときは、非常に強い結合をつくりあげるが、これに反して多数の人に分配されるときは、一人一人に分配される結合量は少なくなり、したがって結合はきわめてゆるいものとなるというのである。または家族結合に破れた人、例えば離婚になった妻は夫に集中した家族感情から解放されるため、その人の有する感情は広い社会の

人々の上に拡散されることとなって、家族結合が破れて、その結果、より広い社会への結合が生じるというのである。すなわち人間の結合量には数と強度において、一定の限界があるというのである。これは一面真理があるように思われるが、しかしそこには、また種々の疑問があると思われる。

先ずここで考えられる疑問は、例えば誠実で温厚な教養のある夫婦が非常に親密な家族結合をつくりながら、他面において博愛の精神に燃えて社会事業に献身したり、または孤児を引きとって教育したり、薄幸な人々のためその世話に従事する場合のように、家族感情と社会感情とが両立しながら、両方とも高度の結合を生じている場合である。若し人間に厳格な結合定量の法則がいつも作用しているならば、夫婦結合が強くなるにしたがって、このような社会奉仕の熱情は生じないはずである。しかし上述のような事象がみられるのは、結合には定量というものが必ずしもあるのではなく、結合感情は無限の量をもっていつもあらゆる方向に拡大する可能性があるのではないだろうかと考えられるのである。

そこで私はこの結合感情と呼ばれるものの内容に質的な区別をつける必要があると考えるのである。例えば夫婦の愛情というものの中にも種々の型があり、また質的な差異があると思われるのである。いま近代家族の夫婦結合に作用する愛情の種類を大体4種類に分けて説明しよう。

オ1の型は性的愛である。これは夫婦結合における基礎的なものとみなされ純粋な生理的形態である。元来これは、その目的が肉体的緊張の消失を求める衝動から出発しているため、その緊張の消失にしたがって、その愛は消え失せ永続性を持たない。それ故それは自己中心的で、むしろ利己的ですからあるため社会性が存在するとは考えられない。近代家族においては、これは、そのままの型で表現されず、むしろ次のロマンチック愛の型をとる場合が多い。

オ2の愛の形態としてのロマンチック愛は、性的本能の派生形態であるとウォードものべている⁽²⁾。その発生は11世紀頃までは認められず、ヨーロッパにおいて封建時代における騎士道に、その起源を發し、次いで近代社会の個人

主義思想，男女平等の思想に影響されて一般化されるようになったといわれている。したがって，これは純粹の生理的な型より，むしろ文化的な型や人格的な型が多く入りまじったものである。この愛によって個人的に選ばれた配偶者は，一個の個性を持った無比なる人格として考えられる点では，前述の性的愛とは大きく相異なる。しかし，この事は相互の深い人格的理解を意味しない。何故なら，この愛は外形的な容姿や，あるいは未知なエキゾチックなものへ急激に発動することが非常に多いからである。このようにして，これは未知なるものへ急激に接近が行われるため，その親密さは短命なもので，永續性を持たぬ場合が多い。真の親密さは長い相互作用を通じ深い人格的理解から生じたものなのである。ところがロマンチック愛における親密さは，主として性的交渉を通じて確立されるもので，この性的な融合は，一瞬，合一の錯覚を作るであろうが，人格愛をとまなわぬ時には錯覚が消えれば，以前にもまして自分達の隔離を感じさせる。かくして，この愛は安定性も，深い人格的合一性もきわめて乏しい状態である。更にこの愛の特色は，独占欲が強いことである。相互には愛し合っているが自分達以外の人々には全く人格愛を感じない夫婦を我々は見ることがある。このような夫婦の愛は，実際には，二人の者が共に自己主義におち入って，相互を同一視し合い，その結果，おのおのの人格的独立性を失い，他の人々とは全く分離しているのである。かくてロマンチック愛は反社会的で，排他的であるのがむしろその愛の強さを証明するものであると考えられているのである。

第3の愛の型は，最近フロムによつてのべられた「チームワークとしての愛」⁽⁸⁾である。これは結婚とは，円滑な働きをするチームであるという考えである。夫婦は理性的で相互に協力し合い，また寛容に行動しなければならないとし，これは恰も円滑に働く雇人と同じである。夫は妻を理解し，助けをあたへ夫は妻の新しいドレスや料理を賞讃し，妻も夫が疲労して不気嫌で家へ帰ったときは，よく理解し，夫が仕事における困難な事について語るときは親切に聞かねばならない。または夫が妻の誕生日を忘れたときには，理解し決して怒っ

てはいけないとフロムは述べている。このようにして双方が互譲の精神をもって行動すれば、夫婦喧嘩というような事は、一応防禦することが出来るであろうが、しかしこれは全生涯を通じて、他人のような関係より一步も進まず、決して心の中に入り込んだ人格の中核から理解し合えるような親密な関係に達することが出来ない。この愛の関係を説明するため、フロムはサリヴァンの愛と親密に関する見解を次のごとく引用している。それによれば「親密とは、人格的価値のすべての構成物を確認することを許しあう二人の人間をつつむ状況の型である。人格的価値の確認は、私が協同作業 (collaboration) と呼ぶ関係の一タイプを必要とする。その協同作業ということは、益々同一化してゆく、すなわち、だんだん接近して来る相互の満足をもとめ、また次に類似していく安定性の操作を保持するために、一方によって表現された欲求 (need) に対して、他方が示す行動が、判然と形式化された様式で適応する行動を意味する」とサリヴァンは述べており⁽⁴⁾、彼の親密という意味は、共同の目的を求めて、自分の行動を他の人の表現された欲求に適応させるものならば、これは全くあらゆるチームの感情に適合するものである。真の愛とは表現されない欲求への反応が含まれている事を考えればチームワークとしての愛を真の愛と考えることは出来ない。このサリヴァンの親密の定義を要約すれば、このような親密から生ずる愛の本質は、二人の人間が、自分達の名誉と優越感情を保つため、ゲームの規則にしたがってやっているのである、と思われる協同労働という状態の中に見られるのである⁽⁵⁾。この関係はいかにも理性的で、一定の行動の様式にしたがって行われるから、調和がとれているかの如く考えられるが、しかしこれは相互の行動が規則によって拘束されているため真の自由がない。それと同時にこれは二人が一組になって、優越感情や利欲感情にあやつられて真の衝動の克服が出来ていない。そして共通の利害を共同に計算し、自分達以外の社会を自分達に対して、敵意を抱くものとみとめ、これに対抗して、一緒に夫婦が社会に立ち向う状況を示しているのである。かくしてこの愛は上述の如く真の合一性を夫婦関係にもたらさず、排他性においても、ロマンチック愛と異

らず、したがって、より広い社会への結合も生じえないのである。

最後に、オ4の愛の型は、人類愛である。これは人格愛ともいわれ、兄弟愛から、その源を発したものである。きわめて稀ではあるが、これは前述の温厚な博愛心に富んだ夫婦に見られるものである。この愛はすべての人に対するもので、排他性がないことである。この愛の中に我々は、すべての人との結合、人間の団結や人間の同一性を経験するのである⁽⁶⁾。例え我々の間には、性質、才能、知能において差異があるとしても、それはすべての人々に共通な人間の人格の中核をなすものの同一性に比較すれば、無視できるものである。愛とはこの全人類に宿る同一性を経験することであり、このため我々は他の人々の人格の末端から中心部へ入り込んで理解することが必要なのである。ただ表面的に人を知覚するのみでは、我々は相互の差異だけを知る許りである。これに反して我々は相互にその人格の中核において理解し合ったとき、各人格の中に存在する同一性を見て、我々は兄弟であるという事実を確認することが出来るのである。このように真の愛は人格の中核と中核との深い関係の仕方の中に求められるものである。かくして人類愛は全人類を対象とする無限の拡がりを持つ一方、強度においても人格の中心において結合するという深さを有しているものなのである。

以上のような4種類の愛の形態中、近代家族における夫婦結合に影響を及ぼすものは、ロマンチック愛とチームワークとしての愛がその大半を占めるであろう。しかしこれらの愛は前述の如く人格的合一性に乏しいため永続性を持たない。ロマンチック愛は結婚が成立するまでは美しく理想的に見えるが、結婚して共同生活が始まるや否や、前述の如きこの愛の不安定性の影響を受けてまもなく夫婦は結婚解消ということになる場合が多い。チームワークとしての愛も、相互の共同目的を持っているとはいえ、人格的な深い相互の理解がともなわず、只人格の部分的な、また規則にしたがって行われるきわめて形式的な結合であるため、わずかの意見の差異から分離的傾向を生ずるのである。若しこのような夫婦に、単にロマンチック愛やチームワークとしての愛だけでなく

相手のより深い人格の奥にひそむ中核において結合する人類愛があるならば、ロマンチック愛やチームワークとしての愛が退去した後にも、この人類愛によって夫婦は、より強固に結ばれるであろう。家族結合は性的愛、ロマチック愛およびチームワークとしての愛から人類愛への転化によって、不安定から安定へとかわり、家族生活の存続性が基礎をおくのである。

そこでこのような安定した夫婦結合における人類愛は、社会感情とどのような関係にたつのであろうか。それは当然結合定量の法則の不適用ということである。すなわちこのような人類愛にもとづく夫婦は、そのままの形で社会への慈善活動を行うことができるのである。夫婦結合が破れなければ、社会への博愛活動が不可能であるというような家族感情と社会感情との相反の関係は、この場合みられない。高田保馬博士は「家族感情を勿論家族という小社会形成の原理と認めるが、更にこれ以上の大社会の形成に関しては、その作用はむしろ破壊的である」とされ⁽⁷⁾、またはウニアルスキーも、「性欲満足されぬときは愛となる。失恋は同胞に対する愛情に変形され、かくて或婦人は慈善の尼僧となる」とのべて⁽⁸⁾、家族感情と社会感情との相反を明示している。このように高田博士やウニアルスキーは、家族感情と社会感情のこの二つの感情を対立的な関係におき、そしてそこに結合定量の法則を見出そうとしたのであるが、その場合の家族感情というものは、前述のような衝動的な性的愛情、またはロマンチック愛や、あるいは封鎖的なチームワークとしての愛の結合感情だけを意味するもので、決して人格愛にもとづく夫婦の永続的結合の基礎となる人類愛を意味するものではないのである。性的感情が夫婦結合の唯一の基礎的要素であるならば、ウニアルスキーや高田博士のいわれるような現象が起るのは当然であろうが、しかし前述のように安定した存続的な家族結合をつくり上げるものは、むしろ人間愛であることを知るならば、家族感情と社会感情との間には相反関係があるとは考えられないのである。

3.

近代家族の好ましくない特質として、その不安定性がとり上げられている。

アメリカのような典型的な近代家族においては、その離婚率は4に1の割合で
きわめて高率を示している⁽⁹⁾。このような現象は何からおこるのであろうか。
これについて E.R. Mowrer は (1) 経済的諸要因、(2) 健康上の諸要因、(3) 社
会的諸要因、(4) 心理的諸要因をあげ⁽¹⁰⁾、その各々について細目をあげている
が、この心理的諸要因の中でも、夫婦の無節制な自我感情の発動がその重大な
原因として考えられる。このような自我感情を構成している心理的諸要因子に
は、闘争感情、支配感情、服従感情等があげられる。夫婦喧嘩には別にとりた
てて指摘される合理的理由がないにもかかわらず行われる場合があるが、これ
は只相互に闘争衝動にかりたてられてなされているにすぎない。夫は家長時代
よりつづいた夫の権力をもって妻を支配し、妻は妻で男女同権の民主主義思想
にもとづいて、このような従属者扱いされることをくやしがり、または相互に
夫婦は言論の自由を発揮して、相手かまわずいいまくり、ここに夫婦闘争が生
じるのである。そこには自己を反省する心がない。人間愛の不足が闘争感情や
支配、服従感情だけを発動させる。例えば現代の青年男女がロマンチック愛に
よって結婚しても人間愛的抑制機がないときは、ただちに前記の衝動が動き出
して夫婦結合を破壊してしまうのである。

かくて近代社会の自由は、夫婦間における自然的衝動を発動させる好機をあ
たえたと考えられる。前記の衝動中、支配、服従感情は特に注意を要するもの
であろう。近代社会において政治的自由は、ほぼ完遂され、また経済的自由に
ついても 現在その実現に人人は異常な関心を示して努力しているにかかわら
ず、精神的自由、すなわち意志の自由は、ほとんど近代人の間においては未開
拓の状態であり、人々は只衝動を無制限に解放することをもって、近代的自由
だと理解し、優越衝動と利欲衝動にかられて、支配、服従感情を発動させる
のである。このようにして近代家族の中においても、そこかしこに封建的支配
は横行し、夫は妻を拘束し、あるいは搾取することによって優越感情を味わい
または利欲感情を満足せしめ、一方妻は劣等感情、または無力感に打ちひしが
れ神経症となるものも多い。このような権威主義的支配、服従感情の外に、近

代家族の夫婦感情の中に見られる型の中に、フロムが「魔術的助け手」と呼んでいるような相手に対して、おだやかな服従の形式で、自分の全生活を全面的に依存せしめようとするものがある(11)。このような人々は自分は一切の努力をしないで、只相手に全面的な依存感情を持って服従することによって、自分が期待する一切のものを獲得しようと望んでいる。もっと極端な時には、このような人の人生は相手をあやつることだけで過され、そこでは、どのような感情も思考も、その目的だけに使用されている。そして若しこの魔術的助け手がこの依存者の期待を充すことが出来なかった時は、依存者は失望し、この失望は魔術的助け手の奴隷になっていたという反感も加わって、たえまない衝突がおこって、ついに夫婦は別離にいたることもある。このような依存者は全く自我感情というものを持たぬかの如くにみえるが、実はその主なる目的は、服従することによって利欲感情を満足させているのである。

以上の如く、支配、服従感情は夫婦関係を自我感情の発動のままに放置する傾向があるので不安定性がきわめて多いと思われるのであるが、それにも拘らず支配、服従感情においては、一方は他方を必ず必要とし相互に緊密な結合関係を持っているかの如く考えられるが、これは往々、愛と混同されることがあるからである。先ず服従感情は愛の表現とみられやすい。他人のため完全に自己を否定する態度や、他人に自分の権利や主張をゆずることは、偉大な愛情の実例として称讃されている。この場合、それは所有や独占を内容とするロマンチック愛等を意味するなら妥当するかも知れぬが、人類愛の如き愛には該当しない。何故ならこの愛は相互の人格の中心において理解し合い、しかも両者の人格は自由と独立を保ち、統一性を持っているものであるから、服従感情とはむしろ対立するものである。支配感情も愛のよそおいで表現される。例えば人は愛しているから支配するのだと主張する。しがし相手の人格と自由を認めぬがぎり、それは真の愛ではなく、只支配することによって、それは優越感情の享樂にひたっているにすぎない。このように支配、服従感情は相互の深い人格的結合を生ぜず、又相互の自由を理解せず、只優越感情、利欲感情等の自然

的衝動によつて発動されているにすぎないのである。

かくして近代的自由は家族内の夫婦関係に眞の自由をもたらさず、かえつて自然的衝動の解放をうながし放縱にしたのであった。その結果、近代家族は自然的衝動にあやつられ、自動人形化され、これが家族崩壊の原因を作ったのである。そこには眞の人格の尊厳というものが無い。夫が妻の、妻が夫の人格を尊重するためには、夫及び妻がともに尊重されるに価いする人格をきずき上げなければならぬ。このような人格を築き上げるためには、即ち人格の尊厳性を得るためには、精神的自由を獲得しなければならない。それではこの精神的自由は如何にすれば得られるのであろうか。それは一切の衝動性を理性の光で照し出さねばならぬ。即ち鬭争、支配、服従等の諸衝動を理性によつて克服したところに獲得出来るのである。

精神的自由は人間の人格の尊厳性の内容をなすものである。それは人間の人格から一切の衝動性を追放するから、はじめて尊厳なものとなるのである。衝動のままに行動する人間には自由はない。衝動から解放されて、はじめて自由があるのである。人間らしい行動ははこのような精神的自由に基づいてなされる行動をいうものである。精神的自由にもとづく人格には、誠実で公明な理性が具わっている。このような理性を基礎とするのでなければ、近代的自由の中において、人々は理想的な、安定した家族関係を作り上げることは出来ないのである。

4.

さて結合定量の法則の適用をしりぞける家族と社会との関係が前述のような温厚な教養深い夫婦に見られるとすれば、このような夫婦はまさに精神的自由を獲得した高い人格の持主であると考えられる。衝動的に行動しないで、誠実に公明な理性にもとづいて行動する2人の関係は安定し、ここには離婚の悲劇はおこらない。それのみでなく、この夫婦は各人格の独自性を失わず、相互に自由な立場を保ちつつ、しかも相互の人格の中核において高度の結びつきを持ち、またより広い社会の人々との結合度も高いのである。その結合は深さと広

さにおいて、その定量がなく、結合はこんこんと湧き出て温かく人間の社会を包むであろう。

しかし現実には、このような夫婦関係はきわめて稀であり、また近代の利益社会においては、この愛の実行には相当の困難がともなうであろう。しかし真の安定した夫婦関係は、この人類愛的要素を持った家族結合をはなれてあり得ないと考えられる。サムナーは、早くよりこれに注目し、夫婦愛 (Conjugal affection) は相互の尊厳、信頼、習慣の上に基礎づけられ、その理想的なものは善良な仲間愛 (Fellowship) を必要とするとのべた⁽¹²⁾。次いでパージエスとロックは近代家族の特質として「制度から友愛 (Companionship) へ」と主張したが、この友愛は、夫婦間の共同の関心、一致、民主的関係の外に、家族メンバーの人格の幸福な発展、即ち人格愛への発展に基礎をおくことを説明している⁽¹³⁾。あるいは、トルックザルとメリルも近代家族の崩壊の原因の重大なものとして、ロマンチック愛の不安定性をあげ、これに代るものとして、夫婦間の習熟をもととする夫婦愛 (Conjugal affection) を示し、その要素の主要なものとして、夫婦間の人格愛より生ずる友情 (Friendship) を強調した⁽¹⁴⁾。ここにおいて、これらの人々が、各々、主張した3つの愛の形態には多少の差はあるであろうが、より広い社会と相反しない人類愛的要素をもった愛を、存続的な安定した家族結合として表示した点に我々は類似点を見出すのである。

近代家族は構造の面においても、また機能の面においても、社会分化の影響を受け、益々不安定性はまぬがれなくなって来た。しかし家族結合に作用する質的に高い愛情を強調することにより、近代家族はこの不安定性を解消してゆくと思われるのである。現在人間は、おろかな離婚を盛んにくり返しているがしかしこれは、やがてはこのような高い人類愛に目覚めた理想的な夫婦関係を作り上げようとする人間の努力が、その根底には潜んでいるのだと、私は考えたいのである。

引用文献

- 1) 高田保馬著 社会学原理, pp. 1069-1072.
同 上 社会学概論, pp. 277-283.
- 2) L.F. Ward, Pure sociology, p. 392.
- 3) Erich Fromm, The art of Loving, p. 87.
- 4) H.S. Sullivan, The Jnterpersonal Theory of Psychiatry, p. 246.
- 5) Erich Fromm, The art of Loving, p. 93.
- 6) Ibid., p. 47.
- 7) 高田保馬著, 社会学原理, p. 298.
- 8) Cf. L.F. Ward, Pure Sociology, p. 389.
- 9) ジョン・サージヤマキ著 アメリカの家族, p. 262.
井上 勇訳
- 10) E.R. Mowrer, Family Disorganization, pp. 176-177.
- 11) エーリッヒ・フロム著 自由からの逃走, p. 192.
日高六郎訳
- 12) W.G. Sumner, Folkways, p. 363.
- 13) E.W. Burgess, "The Family in a Changing Society", American Journal of Sociology, 53 (1948) p. 418.
- 14) A.G. Turxal and F.E Merrill, Marriage and The Family in American culture, pp. 211-217.